

Title	文脈主義の新展開：メタファー分析を通して
Sub Title	Metaphor, contextualism, and logical form
Author	高谷, 遼平(Takaya, Ryohei)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2016
Jtitle	哲學 No.137 (2016. 3) ,p.89- 114
JaLC DOI	
Abstract	Metaphor is far more ubiquitous in language than previously believed. Whereas traditional philosophers of language like Grice took metaphorical meaning to belong to implicature, recent Contextualists, to explain this ubiquity, hold that, as well as literal language, non-literal language including metaphor, metonymy and referential use of definite description can be placed in explicit, truth-conditional content. In this paper, I will examine two Contextualist accounts for non-literal language through their analyses of metaphor. Firstly, Relevance Theorists treat metaphor as a kind of so-called loose use and assume that there is no essential difference between literal language and metaphor in terms of cognitive process. Secondly, formal or semanticist approach posits 'a richer underlying linguistic representation whose meaning will determine the truth-conditions of each metaphorical utterance in context' (Stern(2006), p. 246). After reviewing each approach in detail, I will suggest that the latter can offer a better explanation of how metaphorical meaning is derived and constrained from literal language and indicate a potential of Stern-inspired Contextualism which may treat other non-literal language like metonymy or free enrichment in the same way as metaphor.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000137-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文脈主義の新展開： メタファー分析を通して

—— 高 谷 遼 平* ——

Metaphor, Contextualism, and Logical Form

Ryohei Takaya

Metaphor is far more ubiquitous in language than previously believed. Whereas traditional philosophers of language like Grice took metaphorical meaning to belong to *implicature*, recent Contextualists, to explain this ubiquity, hold that, as well as literal language, non-literal language including metaphor, metonymy and referential use of definite description can be placed in explicit, truth-conditional content. In this paper, I will examine two Contextualist accounts for non-literal language through their analyses of metaphor. Firstly, Relevance Theorists treat metaphor as a kind of so-called *loose use* and assume that there is no essential difference between literal language and metaphor in terms of cognitive process. Secondly, formal or semanticist approach posits ‘a richer underlying linguistic representation whose meaning will determine the truth-conditions of each metaphorical utterance in context’ (Stern (2006), p. 246). After reviewing each approach in detail, I will suggest that the latter can offer a better explanation of how metaphorical meaning is derived and constrained from literal language and indicate a potential of Stern-inspired Contextualism which may treat other non-literal language like metonymy or free enrichment in the same way as metaphor.

* 慶應義塾大学／日本学術振興会

はじめに

ライカンがかつて、メタファーを言語哲学における「暗黒面」と呼んだ¹。事実近年まで、メタファーはあくまでも言語使用に関わる現象、すなわち語用論の領域に位置しており、意味論がメタファーを取り扱うことはないとい多くの哲学者は考えてきた。このような事情は、メトニミーや確定記述の指示的用法にも当てはまる。これらの言語現象はすべて、使用された表現の字義の意味とは大きく異なった意味が伝達されており、それらの非字義性は意味論の関わる所ではないとされてきたのだ。

しかしながら、文脈主義（contextualism）の台頭とともに意味論と語用論の境界があいまいとなり、それに対応して非字義の意味にも再び注目が集まっている。本稿が目指すのは、このような潮流のなかで生まれたメタファー分析を考察することで、文脈主義をめぐる論争に一つの可能性を示唆することである。メタファーはあくまで非字義の意味の一事例に過ぎないが、近年提案されたメタファーの分析は非常に応用性に富むように思われ、それらを検討することは文脈主義論争において少なからず意義のあることだろう。

本稿は以下のように進む。まず1,2節を通して、現代の文脈主義の基本的概念を確認し、グライスのメタファー分析に象徴される伝統的見解の不備を指摘する。続く3,4節で、文脈主義的なメタファーの分析として二つの理論——指標主義と真理条件的語用論——を考察し、それぞれの理論の特徴を浮かび上がらせる。そして5,6節では、両者を二つの観点から比較し、その結果、非字義の意味の新たな理論的位置づけが示唆されることとなる。

本文に入る前に、一つ注意点を述べておく必要がある。本稿において、デイヴィッドソンやグッドマン、ブラックやレイコフなど、伝統的なメタファー分析において著名な論者のほとんどは——グライスを除けば——考察対象とされていない。というのも、本稿は非字義の意味のケーススタ

ディーとしてメタファーを取り扱うにすぎないからだ。もちろん、彼らの業績が本稿で論じる立場にも大きく影響していることは間違いないが、本稿は文脈主義というフレームワークとメタファーの関係に着目しているため、この関係に意識的な論者のみを考察対象としている。

1. 真理条件的内容と推意

まず本節では、文脈主義におけるメタファー分析の予備的考察として文脈主義者が発話された文の真理条件的内容をいかに導くのかを確認し、伝統的見解の問題点を明らかにしよう。

グライスによって文の意味と話者の意味が区別されて以降、意味論と語用論の境界もまた明確になった。文の意味を扱う意味論は、そのアウトプットとして命題的な、すなわち真理条件的な内容をその文に現れる表現の字義的・規約的意味から決定するプロセスを、そして語用論は、真理条件的内容からいかに話者の意味が導かれるのかを明らかにする理論であるという境界が引かれたのである。一部の表現（指標詞や直示語）についてはその内容を決定するために発話文脈を参照する必要があるとはいえ、真理条件的内容決定のために文脈を考慮しなければならないのはごく僅かな場面に限られると考えられていたのだ。

しかしながら、近年の文脈主義をめぐる論争は、グライス以降当然視されてきた上記の構図を大きく覆した。真理条件的内容決定に際して発話文脈の持つ影響は指標詞や直示語の指示対象を決定することのみならず、元来異なる文脈間で不変の内容を持つとされてきた多くの表現に関しても、文脈を考慮することなく内容は決定できないことが明らかになったのだ。さらに、単なる真理条件的内容ではなく、現に言語使用者がコミュニケーションの場において使用している発話の直感的な真理条件的内容²を説明しようとするならば、上記のグライスの構図の不十分さはより鮮明となる。以下の文について考えてみよう。（アスタリスクの付いた文はそれぞ

れの直感的な真理条件的内容を表す。また、以下の文は Carston (2002) で考察されている文を再構成したものである.)

(1) *John is ready.*

(1*) JOHN IS READY FOR THE PARTY.

(2) *You are not going to die.* [怪我をした息子トムに対する母の発話]

(2*) TOM IS NOT GOING TO DIE FROM THAT CUT.

(3) *The steak is raw.*

(3*) THE STEAK IS NOT FULLY COOKED.

まず (1) に関して、*ready* という表現は、ジョンが何について準備ができていのかその表現自体に起因する形で文脈的情報をもとに決定する必要がある。したがってこのような表現は、その規約的意味の内に文脈的情報によって満たされなければならない変項が存在している、言い換えれば、論理形式のレベルで文脈的情報を参照することが義務づけられているような表現ということになるだろう。指標詞や直示語に関しても同様の仕方で内容決定のため文脈が必要であり、これらの表現の内容を文脈から決定するプロセスは「飽和 (saturation)」と呼ばれる。

次に (2) について、われわれがこの発話によって直感的に受け取る真理条件的内容は (2*) のようなものだろう。まさか (2) の発話を聞いてトムが不死であることを母が述べているとは受け取らない。しかしながら、(2) に現れる表現の規約的意味からは FROM THAT CUT という内容は得られず、したがって、これは規約的意味に縛られない自由な文脈的情報の結果ということになる。このようなプロセスで直感的な真理条件的内容の一部を復元する作業は「自由補強 (free enrichment)」と呼ばれ、飽和に加えて自由補強を認めるか否かは重要な論点の一つだ。

自由補強とよく似た文脈の影響として、(3) において生じている表現の

緩和的使用 (loosening, loose use) が挙げられるだろう。(3) に現れる *raw* は、まさに字義通り生であることを述べているのではなく、十分に調理されていないことを述べている。すなわち *raw* は、この表現の持つ規約的意味 (*raw* が表す概念) をあるいみで緩めて使用されているのである。このように、表現の規約的意味を緩めることで（もしくは狭めることで）一時的にその文脈に適した内容を与えるプロセスは「アドホック概念構築 (ad-hoc concept construction)」と呼ばれ、アドホック概念構築もまた飽和を超えた文脈の影響を示している。もしも自由補強やアドホック概念構築を直感的な真理条件的内容に寄与する文脈の情報として認めるのなら、そして、それらなしに直感的な真理条件的内容が得られないと考えるならば、文脈が真理条件的内容に対して持つ影響は非常に大きいことになる。

文脈主義者によれば、飽和は義務的である一方、自由補強とアドホック概念構築は直感的な真理条件的内容を得るために必要な際のみ作用する任意のプロセスであり、こういった効果はまとめて「モジュレーション (modulation)³」とも呼ばれる。したがって、文脈が直感的な真理条件的内容に及ぼす影響には、大別して飽和とモジュレーションという二種類が存在するということになるだろう。

2. 二次的意味としてのメタファー

上記のような背景のもと、かつては語用論の範疇にあると考えられてきたメタファーはどのように扱われるようになったのだろうか。本節では、グライスを例に伝統的なメタファー分析の問題点を明らかにし、メタファーを文脈主義的に説明する現代的アプローチの背景を確認したい。

グライスはメタファーを、質の格率「偽だと言うことを言ってはならない」に違反することで適切な解釈が導出可能となるような推意 (implicature) の一部である論じた⁴。例えば次の文について、

(4) *Tom is an iceberg.*

この文の発話者はトムが本当に冰山であるとは信じておらず、したがって偽であると信じていることを発話したわけである。この発話によって発話者が聞き手に伝えたかったのはおおよそ、トムが冷淡な人間であるということだろう。聞き手は(4)が発話された文脈を考慮し、この文の字義的内容が質の格率に違反していることをもとに、トムが冷淡な人間であることを話者が伝えようとしているのだと推論するのである。

メタフォリカルな解釈が推意のレベルで得られる、言い換えれば、メタファーは意味論ではなく語用論の範疇で扱われるべき言語現象であるというグライスの伝統はその後広く支持を集めたが、近年この分析には多くの疑義が投げかけられている。以下でその問題点を明らかにしよう。

よく知られているように、グライスは発話された文の真理条件的内容としての「話者が言ったこと (what is said)」と、推意としての「話者が含意したこと (what is implicated)」の両者をまとめて「話者が意味したこと (what is meant)」と考えていた。すなわち、言われていることと推意はいずれも話者が意味したことにカウントされるのである。しかしながら、(4)を発話した発話者はこの文の字義的な内容——トムが冰山であること——を本当に「言った」のだろうか。グライスの「言う」の定義によれば⁵、発話者が(4)によってトムが冰山であることを意味していない場合、発話者はこの内容を言ってさえいないということになる。そして、もしも話者が何も言っていないならば、推意に含まれるべきメタファーにも問題が生じる。推意を引き出すためにはその媒体として話者が言ったことが必要であるが、そもそもその媒体が存在しないため、推意を導出することもできなくなるのである⁶。

さらに、メタファーを表現の非字義的意味として扱うグライスの分析には、上記の理論的問題に加えて経験的な問題も生じている。彼は、メタ

フォリカルな解釈は非字義的であり、その解釈は字義的解釈の理解の後に導出されると考えた。すなわち、字義性は非字義性に時間的に先行しているということだ。しかしながら近年の心理言語学の研究において、字義性と非字義性の関係に関する伝統的な見解は否定されている。いくつかの実験によれば、非字義的解釈が認知的観点において字義的解釈より多くの労力を必要とするということではなく、非字義的解釈は字義的解釈を介することなく導かれている。字義性と非字義性は解釈の認知的効果の面で何ら先行関係を持たないのである⁷。

字義的解釈と非字義的解釈の非段階性は、文脈主義者の中でも特に関連性理論（以下、RT）の支持者によって強調されてきた。というのもRTは、発話解釈において最適の関連性をみつけること、そして認知的効果の面で最も労力の少ない仕方での解釈に到達することを重要視するからである。非字義的解釈が字義的解釈を介して得られるのでないとするれば、もはや推意というレベルでメタファーを説明する動機はなくなる。

以上の議論が示唆するのは、推意の一部にメタファーを位置づけるアプローチは不十分だということである。確かに、ある表現がメタファーとして用いられるとき、その解釈は規約的意味を何らかの形で利用している、言い換えれば、規約的意味がメタフォリカルな解釈を制限しているということは間違いなが、それを真理条件的内容と推意の依存関係によって説明することはできないのだ。

では、メタファーはどのレベルの意味に位置づけられるのか。現代の文脈主義者によれば、メタファーは字義の意味と同様のいみで真理を表現しており、その解釈は字義的解釈と同じように真理条件的内容の一部を構成する。すなわち、1節でみた文脈的效果によってメタフォリカルな解釈を導くことが可能だというのだ。次の二つの節を通して、文脈主義者がメタファーをどのように取り扱うのか二つのアプローチを対比させる形で考察していこう。

3. 文脈主義におけるメタファー

上記の背景のもと、メタファーという言語現象、そしてその結果得られるメタフォリカルな解釈は真理条件的内容を構成するという文脈主義的アプローチを検討していく。

1 節で論じたように、文脈主義者は発話された文の真理条件的内容に寄与する文脈の効果として主に二つの効果——飽和とモジュレーション——を想定している。まず飽和は、表現の規約的意味が要請する限りでの文脈的情報によって内容を決定するプロセスであり、したがって飽和が必要な場合その表現が含まれる文の論理形式のレベルに文脈によって固定されるような要素が存在することになる。次にモジュレーションであるが、これは飽和のように表現自体に起因するのではなく、発話の直感的な真理条件的内容を引き出すために必要となるような、純粋な文脈の影響だ。飽和が必要でないような表現であっても、発話文脈によっては字義の意味が真理条件的内容の一部とはならないような場合も考えられるため、もしもモジュレーションを認めるのならばすべての表現は文脈鋭敏的 (context sensitive) ということになる。

では、グライスのないみでの真理条件的内容 (what is said) を超えた直感的な真理条件的内容を得るためには、これらのプロセスのうちいずれが必要だろうか。この問いに対する態度によって、文脈主義は大きく二つに分割される。飽和のみを認める立場は「指標主義 (indexicalism)」と呼ばれ⁸、その支持者としてキングやスタンリー (e.g. Stanley (2000); King & Stanley (2005)) が挙げられる。彼らは、表現の持つ規約的意味のみではその表現を含む文の直感的な真理条件的内容が得られないようにみえる事例について、発話された文はより抽象的なレベル (論理形式) で文脈的情報を要請しており、したがって飽和によって真理条件的内容は導出可能だと論じる。

対して、いずれのプロセスも必要であるという立場は「真理条件の語用

論 (truth-conditional pragmatics)」(以下, TCP) と呼ばれ, RT 論者 (e.g. Wilson & Sperber (2000); Carston (2002)) やレカナティ (e.g. Recanati (2004; 2010)) がその擁護者である。TCP 論者は、飽和のみでは直感的な真理条件的内容を引き出すことはできず、したがって発話文脈によってはモジュレーションもまた必要だと考えるのだ。

指標主義と TCP は様々な事例について二つの文脈的効果のいずれによって説明を与えるべきか議論を戦わせており、未だその決着がつかないものがほとんどである。メタファーもまた重要な論争点の一つであり、以下ではまず、TCP におけるメタファーの取り扱いをみていこう。

TCP 論者として本稿では主に RT 論者を考察するが、RT 論者のメタファー観はレカナティのそれと少なからず異なっており⁹、全く同一の理論として扱うことはできない。しかしながら、モジュレーションによってメタフォリカルな解釈を引き出す点では一致しており、本稿において両者を同じ立場とみなすことに問題はないだろう。

RT の創始者であるウィルソンとスペルベル (以下, W&S) やその後継者であるカーストンによれば、メタファーは1節で確認した表現の緩和的使用によって説明される。メタファーと一般的な緩和的使用の間には程度の違いしか存在せず、したがって統一的な仕方で分析可能だというのだ。次の二つの文を用いて、RT におけるメタフォリカルな解釈の分析をみていこう。

(5) *France is hexagonal.*

(5*) FRANCE IS HEXAGONAL ROUGHLY.

(6) *Robert is a computer.*

(6*) ROBERT LACKS FEELINGS.

(5) は緩和的使用の、(6) はメタファーの事例である。まず (5) につい

て、この文に現れる *hexagonal* の字義的意味は五角形だが、フランスは厳密には五角形ではないため、五角形という概念をあるいみで緩めることによってアドホック概念——おおよそ五角形——が構築され、直感的な真理条件的内容である (5*) が得られることになる。

同様の説明が (6) にも適用される。例えばこの文が、他人の感情など一切考慮することはないが、与えられた仕事は完全にこなすロバートについて発話されたとしよう。このとき (6) の発話はメタファーとして解釈され、その直感的な真理条件的内容は (6*) のようなものになるだろう。RT によれば、(6) に現れる *computer* の外延に人間は含まれないが、この表現が表すコンピューターという概念が緩められることで、その百科事典的情報 (encyclopedic information) の一つ——感情を持たない——を表す概念が文脈的情報から構築され、(6*) という内容が得られるのである。

このように、RT におけるメタファーは緩和的使用の一種にすぎず、メタファーの特殊性 (と感じられるもの) は消し去られる。RT のアプローチにおいて争点となるのはあくまでも緩和的使用による解釈が本当に直感的な真理条件的内容を構成するのかという点であり、メタファーが特別な事例として論じられることはないのだ。

2 節で示唆したように、RT 論者がメタファーを字義的意味と同様に真理条件的内容のレベルに位置づけるのは、メタフォリカルな解釈と字義的解釈の間に認知的効果の面で何ら差異が存在しないことに起因する。RT にとって重要なのは現実のコミュニケーションの場で共有されるような直感的な内容であり、常に字義的意味から出発しなければならない理由はない。W&S によれば、「全く同一の解釈プロセスによって字義的、緩和的、誇張、メタフォリカルな解釈は導かれる。それらの範疇を横断するような連続性が存在する¹⁰⁾」のである。

したがって RT は、二つのいみでメタファーを一般化するといつてよい

だろう。第一に、メタファーを緩和的使用の一種とすること。そして第二に、緩和的解釈を字義的解釈と同様のプロセスで説明することである。このような一般化はレカナティの理論にもみてとれるところであり、TCPにおけるメタファーの取り扱いとして共通の見解であると考えることができる。

4. メタファーの論理形式

指標主義に話を移そう。指標主義とは真理条件的内容に寄与する文脈的効果として飽和のみを認めるアプローチであり、RTのように緩和的使用に訴えることはできない。したがって、RTとは全く異なった方法でメタファーを分析する必要がある。

だが、そもそも指標主義の枠組み内でメタファーを説明することは不可能なのではないのか。例えば次の文について、

(7) *Mike is a soldier.*

この文がマイクの職業を尋ねた質問に対して発話されたならば、*soldier*という表現の字義的意味がそのまま発話の真理条件的内容の一部となる。しかし、上司の理不尽な要求にも文句を言わず従うようなイエスマンであるマイクについて同僚が(7)を発話したとき、*soldier*はメタファーとして使用されているだろう。すなわち、(7)は発話文脈によって字義的な真理条件的内容もメタフォリカルな真理条件的内容も持ちうるのだ。

もちろん、このこと自体は全く問題ではない。というのも、同一の文が異なる発話文脈で異なる真理条件的内容を持ちうるということは文脈主義のテーゼそのものだからである。問題は、一般に飽和が必要だとはみなされない*soldier*という表現が二つの文脈間で全く異なった内容を持っていることにある。この表現が文脈鋭敏的でないならばそもそも飽和は必要な

く、したがってメタフォリカルな解釈は導かれえないのだ。soldier が実は多義的であり、二つの文脈で用いられている soldier は異なる表現であるという主張も受け入れられないだろう。原理的に無数の——とはいえ、ある程度の限度はあるが——メタファーが一つの表現によって可能であり、それらすべてが異なる語彙としてカウントされるとは考えがたい。

このような事情は、指標主義者をメタファーを始めとする非字義の意味から遠ざけてきた。指標主義の旗振り役であるスタンリーも、確定記述の指示的用法を例にして非字義の意味の多くを彼の理論内で説明できないことを認めている¹¹。ただし、指標主義がTCPと対立しているのは、これらの事例よりむしろ自由補強についてであることは述べておかななくてはならない。TCP論者による自由補強の事例は、緩和的使用などに比べると、直感的には飽和によって説明可能なものであるように思える。例えば天気に関する発話について、その真理条件の内容を決定するためには常にその天気である場所が特定されなければならず、したがってこの文の論理形式には場所のための変項が存在するという指標主義的説明は一定の説得力を持つ。同様に、量化表現について量化のドメインがいかに制限されるのかという問題にも指標主義は有力な説を提出しているといっていよう¹²。

以上のような背景のもと、指標主義にはメタファーに関して二つの選択肢が残されることになる。スタンリーのように、メタファーは真理条件的内容に影響せず、したがってグライスの説明とは異なった仕方でもメタファーを推意に位置づけるのが第一の選択肢である。第二の選択肢は、上記のような困難にも関わらずなお飽和によってメタファーを説明するため、メタフォリカルな解釈を導出できるようなより豊かな論理形式を考案することだ。

この第二の選択肢をとる論者として、スターンが挙げられる。彼は、ある文の発話がメタファーとして解釈されるときかつそのときのみ論理形式

のレベルでメタフォリカルな解釈を要請するようなオペレータが存在していると想定することで、メタフォリカルな解釈が字義的解釈と全く同様の仕方では真理条件的内容を構成すると論じた。以下で彼の理論を検討していこう。

スターンの理論の最も革新的な点は、カプランの「dthat」オペレータになぞらえてメタファーを分析したことにある。よく知られているように、「dthat」は確定記述の指示的用法の分析においてカプランが用いた言語的装置であり、確定記述（より一般的には単称名辞）に付与されたときその記述を語彙的に直示語化する機能を持っている。そして、「dthat」が付与された記述「dthat [α 」は、 α の（カプラン的）意味特性が定数関数であるにも関わらず、発話文脈によって内容を変えることができる。確定記述は指示的用法で使用されたときと帰属的用法で使用されたときでは異なる意味特性を持っており、論理形式のレベルで両者は異なる表現となるのだ。目下のわれわれの枠組みでいえば、「dthat」は飽和を必要としないような（論理形式レベルでの）表現を、飽和を必要とするような表現へ変換してくれるということになるだろう。

スターンは「dthat」を利用する形で、論理形式のレベルでメタフォリカルな解釈を要請するようなオペレータ「Mthat」を考案した。「Mthat」は以下のように特徴づけられる。

「Mthat」は論理形式レベルのオペレータであり、（字義的）表現 φ に付与されたとき、文脈鋭敏的表現「Mthat [φ 」を生み出す。それぞれの文脈 c における「Mthat [φ 」のトークンは、 c において表現 φ にメタフォリカルに関連（metaphorically-associated）すると前提されるような性質の集合を表現し、 $\langle \dots \text{Mthat} [\varphi] (c) \dots \rangle$ という命題はある値踏みの世界において真か偽のいずれかである。

(Stern (2006), p. 262.)

ここで、 φ にメタフォリカルに関連（以下、M 関連）する性質とは、 φ の定義やステレオタイプ、そして共同体における常識的知識など、非常に多岐にわたる。重要なのは、それらの性質が会話の参加者によって共有されているということである。このいみで、M 関連する性質は φ という表現の使用において前提となっている性質なのであり、「Mthat [φ]」はこのような諸性質を表現しているのだ。意味特性とは文脈を取って内容を返すような関数であるが、目下の「Mthat [φ]」の場合、ある文脈 c をとり、 φ に M 関連した諸性質の中から c において適切であるような性質を返す関数がその意味特性ということになるだろう¹³。

例を用いて「Mthat」の働きを確認しよう。次の文について、

(8) *Juliet is the sun.*

(8') Juliet Mthat [*'is the sun'*].

(8*) JULIET IS CHEERFUL.

(8) がジュリエットの天真爛漫な振る舞いを見た友人に発話されたとする¹⁴。このとき (8) はメタファーとして解釈されるべきであり、(8') はこの文のこの文脈での論理形式、(8*) は真理条件的内容を表す。まずわれわれは、*is the sun*（もしくは単に *sun*）という表現に、尊敬に値する、性格が明るい、他人を元気にする、等々の M 関連した性質を（常に意識的ではないにせよ）結び付けている。そして、そういった諸性質の中から発話された文脈において適切であるような性質——性格が明るい——が選び出され、その性質が (8*) の要素となるのである。

(8') で示されているように、メタフォリカルな解釈は論理形式のレベルで要請されており、この論理形式から真理条件的内容を引き出すために必要なのは飽和のみということになる。「Mthat」という言語的装置を用意することで、RT においては中心的な枠割を演じたアドホック概念構築

を用いることなくメタファーを説明することができるのだ。

しかしながら、スターンの理論はもはや標準的な指標主義とはいえないということは述べておかななくてはならない。伝統的に、ある文には（構文論的あいまい性がなく、多義的表現を含まない限り）一つの論理形式が対応し、その論理形式に従って意味論的な解釈が与えられるとされてきた。一般的な指標主義は、この伝統を継承しながら TCP 論者が主張するような文脈の侵入を論理形式のレベルで捉えようとしてきたのである。それに対してスターンのアプローチは、一つの文が発話文脈によって異なる論理形式を持ちうることを含意している。というのも、ある文が字義的に使用される文脈とメタフォリカルに使用される文脈で異なる論理形式が割り当てられるからである。

では、何が論理形式の可変性を可能にするのか。それは、発話された場面での文脈の情報である。より正確には、発話された文を構成するいかなる表現の規約的意味によっても要請されないような、すなわち飽和のプロセスで求められる情報とは異なった仕方と与えられるような文脈の情報である。これは、TCP 論者が自由補強や緩和的使用において要請する飽和を超えた文脈の情報と対応している。

このことが示唆するのは、TCP の一種としてのスターンの理論である。文脈の情報が何に影響するのかという問いに対して、TCP では「意味に」と答える一方、スターンは「構文に」と答えるのだ。したがって、スターンの理論は確かに飽和によってメタファーを説明してはいるが、そのために必要な論理形式は多様な文脈の情報によってのみ可能となるのであり、そのような理論はもはや指標主義ではなく TCP と呼ぶべきかもしれない。事実レカナティは、自身の理論とは異なる TCP としてスターンの理論を紹介しており、論理形式を変える文脈の効果もまたモジュレーションの一例であると論じている¹⁵。スターンはこのことにそれほど意識的ではないようだが、彼の指標主義とスタンリーらのそのの間には重要な違いが存在

しているのである。

だが、もしもスターンによるメタファーの分析がTCP 的であったとしても、緩和的使用に訴えない点で明らかに異なっており、いずれの理論がメタファーにおいて優位性を有しているのか検討することには価値があるだろう。5, 6 節を通して、RT とスターンの理論を比較する。

5. 意味と表現

RT と指標主義はいずれもメタフォリカルな解釈を真理条件的内容の一部に組み込むが、その方法は大きく異なっている。本節ではまず、意味論と語用論のインターフェースという観点から両者の違いを明らかにしよう。

彼らの分析の違いは、一体何に起因しているのだろうか。メタフォリカルな解釈を真理条件的内容として取り扱うという点で一致しながら、なぜ全く異なった方針をとるのだろうか。そのヒントは、両者の意味論・語用論観の違いにある。

1 節で指摘したように、意味論と語用論の境界には発話された文の真理条件的内容が存在すると考えられてきた。言い換えれば、自然言語の意味論とは真理条件の意味論であると前提されてきたのだ。指標主義は、このような伝統的意味論観の後継者であるといってよい。というのも、飽和というプロセスは常に論理形式のレベルで可視化されており、そこで要請された限りでの文脈的情報を取り込むことによって真理条件的内容が決定されるというのが指標主義の主な主張だからである。

このような姿勢はスターンの理論にも受け継がれている。ある表現 ϕ が字義的に解釈されるべきかメタフォリカルに解釈されるべきか、すなわち論理形式のレベルで ϕ なのかMthat [ϕ] なのかは飽和に用いられる文脈的情報によっては決定されないが、いったん論理形式が固定されれば、その論理形式に沿って真理条件的内容が得られる。このいみで、スターンの

理論における飽和を超えた文脈の影響とは、前意味論的な影響といえるだろう。論理形式の可変性を認め意味論のインプットを変化させることで、意味論のアウトプットが真理条件の内容であるという伝統的見解を保持しているのだ。

対してRTはどうだろうか。RTの意味論観は伝統的なそれとは一線を画しているといつてよい。RT論者のカーストンによれば、RTの意味論とは言語の意味論、もしくは翻訳の意味論であり、彼女は言語の意味論を発話解釈におけるコード解読プロセスと位置づけている¹⁶。このプロセスは、インプットとして発話された自然言語表現をとり、自然言語とは異なる表示体系——心的言語、思考の言語——の表示をアウトプットする。すなわち、自然言語表現を心的言語へ翻訳するのが意味論の仕事ということになる。意味論によって決定された心的言語表示のレベルで自由補強やアドホック概念構築が実行され、直感的な真理条件的内容が得られるのだ。RTにおける文脈の影響とは、後意味論的な影響なのである。

両者の意味論・語用論観、そして真理条件の内容に至るまでの解釈プロセスを図式化するならば、おおよそ次のようなものになるだろう。

指標主義：自然言語文→論理形式 LF→(前意味論的な文脈の情報)
 →論理形式 LF'→(意味論の解釈)→真理条件の内容
 RT：自然言語文→(意味論の解釈)→心の言語表示 MR
 →(後意味論的な文脈の情報)→心の言語表示 MR'=真理条件の内容

ここで、指標主義における飽和は意味論的解釈に、RTにおける自由補強やアドホック概念構築は後意味論的な文脈の情報に含まれる。指標主義においてはあくまでも意味論的解釈の結果が真理条件の内容であるのに対して、RTにおいては文脈的信息による後意味論的効果、すなわち語用論的効果の結果真理条件の内容が得られていることがわかるだろう。端的にい

えば、前者はメタファーを意味論に、後者は語用論の範疇に置くのである¹⁷。

スターンのメタファー分析から示唆される以上のような解釈プロセスが、RTのそれと比して優れているのか否かを判断することは容易ではない。さらに、レカナティなどRT論者ではないTCP論者はRTとは異なる解釈プロセスを想定しており¹⁸、したがってRTと指標主義の比較が直接にTCPと指標主義の比較をいみするわけでもない。しかしながら、たとえ両者の解釈プロセスが同等な理論的説明能力を持ってメタフォリカルな解釈を導出可能だとしても、形式的側面、特に合成性（compositionality）という観点において指標主義には強みがあるということは指摘できるように思われる。

合成性とは「複雑表現の意味は、その構成要素である単純表現の意味と、構文論の構成規則によって決定される」という意味の合成に関する原理であるが、一般に意味論はこの原理を反映する形で構築されなければならないと考えられてきた。真理条件的内容が意味論のアウトプットであるとする伝統的見解においては、真理条件的内容もまたその構成要素の表現の意味から合成的に決定されるということになるだろう。指標主義では意味論的解釈のインプット、すなわち論理形式のレベルで現れる表現や構文論的構造が明示化されているため、その形式に従うことで合成的に真理条件的内容を決定することができる。

対して言語的意味論を採用するRTは、意味論的解釈の後に得られる心的言語表示が文脈的情報によって様々な形でモジュレートされるため、その結果得られる直感的な真理条件的内容が合成性を保持しているとはいえない。事実、カーストンは合成性に関して言語的意味論自体は合成的である一方、真理条件的内容は合成的でないことを認めている¹⁹。真理条件的内容が合成的に導かれなければならないという主張は議論の余地のあるものであり、これをもってRTが指標主義に劣っていると結論づけることは

できないが、文脈主義において頻繁に論じられる合成性の問題に対しスターンの指標主義は優れた迂回案を提出しているといつてよいだろう²⁰。

6. 字義性と非字義性

ここまでみてきたように、RT と指標主義の両者はメタフォリカルな解釈の字義的解釈に対する依存関係を認めない。より正確に述べるなら、まず字義的な真理条件の内容が決定し、そこからメタフォリカルな推意を引き出すという解釈プロセスを否定している。しかしこれは、非字義性が字義性に何ら制約を受けないということをいみするのではない。もしも字義的解釈と非字義的解釈の間に一切の関係性が認められないならば、非字義的解釈は表現の多義性を示すに過ぎなくなってしまうからだ。したがって最後に、字義性と非字義性の間に存在する関係をどのように捉えるのかという点から RT と指標主義を比較する。

この問題に関して両者に違いを生み出すのは、メタフォリカルな解釈が使用された表現のいかなる側面に制限されるのか、という点である。アドホック概念構築によってメタフォリカルな解釈を引き出す RT において、その解釈は使用された表現の表す内容（解釈、概念）に結び付けられているような背景的知識に依存する。すなわち、字義的解釈が中心に位置づけられるような諸内容の集合に含まれるか否かによってメタフォリカルな解釈を制限するのである。

指標主義はどうだろうか。4 節で論じたように、スターンの理論においてメタフォリカルな解釈は M 関連した性質の中から選ばれるわけだが、それらの性質は使用された表現の字義的解釈ではなく、表現そのものに結び付けられているような性質である。「Mthat」オペレータは、論理形式のレベルでそれが付与される表現を語彙的にメタフォリカルな解釈が必要な表現へと変換する。これがいみするのは、メタフォリカルな解釈を制限するのは使用された表現であり、その表現に関連するような諸性質の中に

含まれるか否かという点でメタファーは字義性に依存するということである。

メタフォリカルな解釈が表現そのものとその表現の字義的内容いずれに制限されているのかという点は非常に些末な問題に思われるかもしれない。しかしながら、全く同一の内容を持つような異なる表現が存在するという事実によって両者の違いは鮮明となる。例えば、*dog* という表現と *canine* (イヌ科の、という字義的内容を持つ) という表現は同一の内容を持っている。したがって、RT においてはこれらの表現に結び付けられるような背景的知識もまた同一ということになるだろう。対して指標主義においては、表現としての違いが直接的に背景的知識の違いとなるため、*dog* と *canine* には異なる M 関連した性質が結び付けられうることになる。

この違いがいかなる影響を持つのか、スターンが用いている例を再構成してみよう²¹。

(9) *Sam is a Cicero.*

(9*) SAM IS AN OUTSTANDING ORATOR.

(10) *Sam is a Tully.*

(9) と (10) が同一文脈で発話されたとする。また、発話者が *Cicero* という表現には雄弁家という内容を結び付けていながら、*Tully* という表現には結び付けていないとしよう。ここで、キケロとタリーは共指示的な表現であり内容も一致するため、その内容——キケロ——に背景的に結び付けられる諸内容も等しい。したがって RT 的な分析においては、二つの文は（発話文脈が同一ならば）同一のメタフォリカルな解釈を導出することになる。しかしこの話者は、(9) によって (9*) というメタフォリカルな真理条件的内容を表現しうる一方、*Tully* という表現に雄弁家という性質

を結び付けていないため、(10)によっては(9*)を表現できないのである²²。

以上の議論により、ある文脈においてはRTでは説明できないメタファーの事例が存在することがわかるだろう。表現自体とその字義的内容に結び付けられる諸内容は常に一致するわけではなく、ときに表現のみに結び付けられる内容を用いてメタフォリカルな解釈が生じるのである。

もちろんここでは、メタファーに対する字義性の制限は指標主義とRTについて前節で図式化された解釈プロセスのもとに論じられている。したがって、前節での一般化を認めず何らかの改定を試みた理論ならば、この問題は消し去られるかもしれない。しかしながら、現時点においては、両理論の理論的背景に起因して導出できるメタフォリカルな解釈に違いが生じうることとは指摘しておくべきであろう。

おわりに

以上の議論によってRT（もしくはTCP）と指標主義いずれの分析が適切であるのか、最終的な判断を下すことはできない。5節で論じた解釈プロセスの違い、そしてそこから導かれる合成性概念との両立可能性のみでは理論全体の優位性を決定するには至らないだろうし、6節で論じたメタフォリカルな解釈の制限に関してもRTに修正を加えることで対処可能かもしれない。

ただ、元来飽和という文脈的効果のみでは説明不可能だと思われていたメタファーを、RTと同程度——もしくはそれ以上——の説明力を持って飽和によって分析したスターンの理論は、指標主義の新たな方向性を示唆している。すなわち、メタファーに限らずメトニミーや確定記述の指示的用法、そして自由補強によって説明されてきた言語現象について、論理形式レベルの変性という形で対処できる可能性があるのだ。

事実、マルティはいくつかの自由補強の事例をこの方法によって分析し

ているし²³，スターン自身はメトニミーにも彼の分析が適用可能であると考えている²⁴。4節で指摘したように，この理論が指標主義と呼ぶにふさわしい理論か否か判断は難しいが，レカナティやRT 論者に代わる新たな文脈主義者の姿を示したことは大いに価値のあることだ。

スターンの理論を拡張することによって非字義的意味の大部分を TCP と同じように取り扱えるようになったとき，本稿で論じられた指標主義の優位性は TCP と指標主義の対立において非常に重要な判断基準となることだろう。

註

¹ Cf. Lycan (2000), p. 205., 邦訳, p. 291.

² 直感的な真理条件の内容，もしくは直感的に言われていることとは，レカナティによれば，近接可能性という次の制約を満たす命題である。近接可能性：「言われていること」は会話の参加者にとって直感的に近接可能でなければならない。（何かの誤りが生じて参加者が「正常な解釈者」と考えられない場合を除く）。」(Recanati (2004), p. 20., 邦訳, p. 40.) 詳しくは，Recanati (2004)。

³ この術語は主にレカナティによって頻繁に使用されている。レカナティは関連性理論者に比して自身の理論の形式的側面を重要視しており，文脈の影響が言語的制約の範疇か否かという点を強調するため飽和とモジュレーションという区別を用いている。詳しくは，Recanati (2004; 2010) を参照。

⁴ Grice (1989), pp. 33-34., 邦訳, pp. 49-50.

⁵ Grice (1989), p. 87., 邦訳, pp. 131-132.

⁶ グライスはこのような批判に対し，「そう言っているかのようにみせること (making as if to say)」という概念を用いて問題の解決を図っている。しかし，カーストンによれば，「言うこと」から「そう言っているかのようにみせること」への移行もまた，多くの問題をはらんでいる。詳しくは，Carston (2002), pp. 114-116., 邦訳, pp. 176-178.

⁷ 特にメタファーに関しての実験結果を論じている文献として，Gibbs (1994) や Glucksberg *et al.* (1982) を参照。メタフォリカルな解釈を求める文と字義的解釈を求める文を被験者に示し，その解読時間をはかることでメタフォリカルな解釈と字義的解釈の時間的先行関係を調べた実験 (Ortony *et al.* (1978)) をもとに，Gibbs (1994) は字義的意味とメタファーの間に認知的効

果の面で違いがないと論じている。

- ⁸ ここでの指標主義は、いわゆる極小主義 (minimalism) とは異なることに注意してほしい。ボーグやカペレン、ルポアらの極小主義者は、表現の (意味論的) 内容が文脈に影響を受けることはほとんどなく、文脈と独立な意味論的アウトプットが存在すると考えている。これは、1 節で論じられた様々な事例についてそもそも飽和さえ認めない立場であり、論理形式レベルでの解決を図る指標主義とは大きく異なる。(ただし、カペレンとルポアは指標詞など一部の表現の意味論的内容決定のために文脈が必要なことは認める一方、ボーグは一切の文脈の侵入を許さないという点で極小主義者内にも違いは生じている。) また、しばしば指標主義と極小主義に対して「字義主義 (literalism)」という術語が用いられるが、その使用法は論者によって異なっており混乱を生むため、本稿においては用いない。

⁹ Cf. Carston (2002).

¹⁰ Wilson & Sperber (2000), p. 245.

¹¹ Cf. King & Stanley (2005), p. 130.

¹² 天気的事例について、飽和によるアプローチとして Stanley (2000)、自由補強による解釈の爆発的增加論証 (over-generation argument) に対する反論として Hall (2008) を参照。量化表現について、飽和によるアプローチは Marti (2006)、モジュレーションによるアプローチは Recanati (2002) などを参照。

¹³ ただし、ここでの文脈はいわゆる狭い文脈 (narrow context) ではない。カプランの指標詞の理論 (cf. Kaplan (1989)) において、文脈のパラメータは発話者、場所、時刻、そして可能世界であり、それらによって指標詞や直示語の指示対象は決定されている。しかし、スターンの分析において文脈が「Mthat [ϕ]」の内容を決定するためには、文脈には少なくとも M 関連した性質の集合が含まれていなければならず、したがって文脈のパラメータとして M 関連した性質が存在する必要がある。

¹⁴ メタフォリカルな解釈を簡略化するため、本来ロミオが発話した文脈とは異なる文脈を想定している。

¹⁵ レカナティはスターンの分析から示唆される TCP を、次のように特徴づけている。スターンの図式において、「あるいみでは、自由な語用論のプロセス [自由補強やアドホック概念構築] は存在しない。しかしながら、あるいみではそのようなプロセスは存在し、それらは構文論レベルでの変項の自由な生成という形で再記述され、説明されるに違いないのである。」(Recanati (2010), pp. 139.)

¹⁶ Cf. Carston (2002), pp. 56–57., 邦訳, pp. 87–88.

- ¹⁷ もちろんここでの「語用論」という術語が指す理論は、論者によって大きく異なる。スターンにとっての語用論とは決定された真理条件の内容から推意を導くというグライスのなそれであるが、RTにおいては言語の意味論によって得られた心的表示から真理条件の内容を引き出すプロセス、さらにそこから推意をプロセスいずれもが語用論の範疇に含まれる。
- ¹⁸ レカナティの解釈プロセスを簡単に図式化するならば、以下のようになる。

レカナティの TCP: 自然言語の文→論理形式 LF →(意味論的解釈)
→意味論的内容 (≠直感的な真理条件の内容)→後意味論的な文脈の情報
→真理条件の内容

ここで、自由補強やアドホック概念構築が後意味論的な文脈の影響であることから、レカナティと RT 論者の類似性がみてとれるだろう。しかし注意が必要なのは、彼が言語の意味論を認めていない点である。これは、彼があくまでも真理条件の内容が意味論のアウトプットであるという立場を堅持し、その結果意味論の内に文脈情報の多くを組み込むことに起因する。したがって、上記のレカナティの図式化における「後意味論的な文脈の情報」は、後意味論的でありながら意味論の範疇にあり、彼は意味論と語用論の間に明確な区別を置いていないといつてよいだろう。(cf. Recanati (2010), p. 43.)

- ¹⁹ Carston (2002), pp. 72-74., 邦訳, pp. 112-114.
- ²⁰ 後意味論的文脈の影響を認めながら真理条件の内容レベルの合成性との両立可能性を探ったアプローチとして、Recanati (2010) では従来の合成性に代わって語用論的な合成性という概念を用意した。これはレカナティが RT に比して形式的側面を重視するためであるが、語用論的合成性及びそれを反映した解釈プロセスには、RT にはない問題点がある。
- ²¹ Cf. Stern (2000), p. 293.
- ²² しかしながらこの論点は、「Mthat」の形式的側面にも問題を生じさせる。というのも、表現 φ に結び付けられる諸性質について、この分析においてそれを個別化するのは表現 φ ではなく φ の意味特性だからである。これは、指標詞など非定数関数の意味特性を持つ表現にとっては問題とならない。そのような表現の場合、表現自体と意味特性は一対一対応し、両者の個別化の基準は同一となるからだ。しかし、固有名や一部の述語は発話文脈に関わらず不変の字義的内容を持っており、したがって内容が同一の表現は同一の意味特性もまた持つことになる。例えば上記の *Cicero* と *Tully* は、表現自体は異なりながら同一の意味特性を持つため、表現レベルで達成される個別化が意味特性ではなされえないのだ。この問題に対してスターンは、一定の形式化を諦め

ることで対処しようとするが、むしろメタファーと指標詞・直示語の類似関係をある程度緩めることでも対処可能なように思われる。

²³ Cf. Marti (2006).

²⁴ Cf. Stern (2006), pp. 269-272.

²⁵ 本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費 15J08122）の助成を受けたものである。

参考文献

- Carston, R. (2002). *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell. (西山佑司ほか訳. (2008). 『思考と発話——明示的伝達の語用論——』研究社.)
- Gibbs, R. W. (1994). *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge: CUP.
- Glucksberg, S., O. Gildea, & H. Bookin. (1982). "On Understanding Non-literal Speech: Can People Ignore Metaphors?". *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 21(1): 85-98.
- Grice, P. (1989). *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass: HUP. (清塚邦彦訳. (1998). 『論理と会話』勁草書房.)
- Hall, A. (2008). "Free Enrichment or Hidden Indexicals?". *Mind & Language* 23(4): 426-456.
- Kaplan, D. (1989). "Demonstratives". In J. Almog, J. Perry & H. Wettstein (Eds.), *Themes from Kaplan*. Oxford: OUP. 481-563.
- King, J., & J. Stanley. (2005). "Semantics, Pragmatics, and The Role of Semantic Content". In Z. Szabó (Ed.), *Semantics Versus Pragmatics*. Oxford: OUP. 111-164.
- Lycan, W. G. (2000). *Philosophy of Language: A Contemporary Introduction*. London: Routledge. (荒磯敏文ほか訳. (2005). 『言語哲学——入門から中級まで——』勁草書房.)
- Martí, L. (2006). "Unarticulated Constraints Revisited". *Linguistics and Philosophy* 29(2): 135-166.
- Ortony, A., D. L. Schallert., R. E. Reynolds., & S. J. Antos. (1978). "Interpreting Metaphors and Idioms: Some Effects of Context and Comprehension". *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 17: 465-477.
- Recanati, F. (2002). "Unarticulated Constituents". *Linguistics and Philosophy* 25(3):

299-345.

Recanati, F. (2004). *Literal Meaning*. Cambridge: CUP. (今井邦彦訳. (2006). 『ことばの意味とは何か ——字義主義からコンテキスト主義へ——』新曜社.)

Recanati, F. (2010). *Truth-Conditional Pragmatics*. Oxford: OUP.

Stanley, J. (2000). "Context and Logical Form". *Linguistics and Philosophy* 23(4): 391-434.

Stern, J. (2000). *Metaphor in Context*. Cambridge, Mass: The MIT Press.

Stern, J. (2006). "Metaphor, Literal, Literalism". *Mind & Language* 21(3): 243-279.

Wilson, D., & D. Sperber. (2000). "Truthfulness and Relevance". UCL Working Papers in Linguistics 12: 215-254.